

公園前派出所の休憩室。

普段はそこで休憩時間に娯楽を楽しむ人がいたり、昼寝をするこの地域では有名な名物お巡りさんがいる。

しかし、そこに今いるのは二人、しかも二人ともこんな小さな派出所の休憩室には似合わない美男美女。

美男は中川圭一、美女は秋元麗子だ。

共にこの公園前の派出所に勤務する歴とした警察官である。

その中川の上に、婦警とは思えないようなピンク色の超ミニスカ制服で谷間を見せた金髪爆乳の麗子が馬乗りになり何やら騒いでいた。

「ほーら♥ 圭ちゃん、観念なさい♥ 手に持ってるのは何？」

「ちょっと、麗子さんっ！ だからこれは先輩が忘れていったもので、あっ！」

事の発端は二人の先輩にあたる両津が休憩室にAVを置きっぱなしにして、それをたまたま中川が手に取ったことにある。

それを見つけた麗子が面白がり馬乗りになり、そしてそのままAVを取ると――。

「ふうん、圭ちゃんもやっぱり男の子ってことよね？ 両ちゃんとは違う、みたいな顔してても一緒♥」

――ハーフの美貌の顔に悪戯っぽい笑みを浮かべてそのパッケージを見ていく。

観念したようにしている中川を見て、麗子は“ペロリ♥”と舌なめずりをすると制服のままスカートの中に手を入れて下着を脱いだ。

「え！？ 麗子さんなにを！」

「圭ちゃんがいけないのよ？ 勤務中にこんなしてるから♥ だから、責任取ってよね？」

「ちょっと麗子さん！ やめてくださいって！ 誰か来たら！」

ノーパンになった麗子はその大きな胸を揺らしながら中川のズボンを下ろしていく。

ベルトを外してズボンを下ろすと、当然チンポが露出してしまふ。

「ほら♥ 圭ちゃんだって大きくしてるんじゃない♥ やーらし〜♥」

「そ、それは麗子さんが……！」

「男でしょ？ 人のせいにしないの♥ ……ふふ、彼氏と別れたから久しぶり♥」

硬く勃起している中川のチンポに触れた麗子。

がちがちに硬くなっているそれを掴むとゆっくりと優しくしごいて硬さやサイズを確かめていく。

中川は抵抗したくても女性に乱暴な真似は出来ないと紳士的に対応はしつつも、麗子と言うまさに“ボン♥ キュッ♥ ボン♥”な美女に迫られて興奮はしない訳ではない。必死に彼女を落ち着かせようとしていく中川の股間を撫でていた麗子は、また舌なめずりをすると――。

「私の方はもう準備できてるの♥ 仕事してると、ほら、エッチな目で見られることも多くて……♥」

「え……？ あ！ 本当にまずいですって！」

「もう遅いわ♥ あっ♥」

――妖艶に、いやらしく微笑んだ彼女はチンポの根元あたりをもったままその上に腰を落としていく。

胸もデカいけれども、お尻もデカイ♥ むっちりした下半身を落として、既に濡れているおまんこでチンポを咥え込んだ♥

“ぬっふう♥”

「ああっ！ 麗子さんっ……！」

「あっ♥ 圭ちゃんのかたあい♥ ふふ、ほら、休憩室でセックス、しちゃった♥」

麗子は腰をゆっくりと落として、そのおまんこでチンポをしっかりと根元まで咥えこんだ♥

見た目も良ければ中身も、おまんこも良い麗子の名器なおまんこはチンポをキュンキュンと締め付けていく。

「あっ♡ 圭ちゃんのおちんちんビクビクしっぱなしね……♡ なんだかんだ言って抵抗しなかったし、もしかして期待しちゃってた？」

「そ、そんな、訳ないじゃないですかっ……！」

きゅう♡と吸い付くように締め付ける麗子のおまんこ♡
腰を揺らすたびに制服に包まれたデカパイが“たっぷん♡”と揺れていく。
綺麗なサラサラの金髪を揺らし、時折かき上げてメスの匂いを垂れ流しにしていく。

「抵抗しないってことは、あ♡ そういうことじゃないっ♡ 白状なさ〜い♡」

「あああ！ ち、違い、ますって、こんなっ……！」

“ぬっぶぬぶ♡”

“ぱんぱんっ♡”

麗子は中川の胸板あたりに手をつけてそのまま腰を振っていく。
慣れ動きの騎乗位で、おまんこからは汁がどんどん溢れていた♡
彼氏と別れてしばらくエッチできていなかった興奮と発情が溜まりに溜まっているようだった♡
腰の動きもどんどん激しくなり、胸板についた手、その指が動いて制服越しの乳首を探っていた。

「うっあ麗子さんっ!？」

「んっあ♡ あらっ♡ んあ♡ 圭ちゃんったら、乳首でも感じるの？ 女の子みたい♡」

乳首への刺激に中川が反応すればそれを面白そうに麗子は笑って、更にコリコリ刺激しながらの腰振りをしていく。
お尻を上下させて、パンパンと音を響かせながらのピストン。
おまんことチンポの接合部からはマン汁が溢れて、トロトロと垂れていく♡
派出所の休憩室が二人のエロい匂いで満たされていき、それが更に興奮を呼び起こしていく♡

「あああ♡ ん……♡ 圭ちゃんっ♡ おちんちん♡ 震えてるわよ？ ふふ、もし

かして、もう出ちゃうの？ キャー♡」

「れ、麗子さんっ、う、上手過ぎてっ、あっ……！」

「はあはあ♡ んっ♡ 私は、普通よっ♡ っああ♡ はああ♡ 圭ちゃんが早すぎる、だけっ♡」

ピンク色の制服のその上着のボタンを麗子は外していくと元々見えていた谷間が更にハッキリくっきり見えていき、動くたびに“たっぷん♡ たぷん♡”と揺れていく。腰を振る速度も速くなっていき、かつ小刻みになり麗子自身もイキそうになっているようだ。

長い髪が乱れるのも気にしないで、外にまで響きそうな声をあげていく。

「はあ♡ ああ♡ んっあ♡ はあああ♡ 圭ちゃんのおちんちんっ、良い、かもっ♡ これからも、お願いし、よっか、なあっ♡ んっ♡」

「そ、そんな、ダメですってっ！ ああ！ 先輩に知られでもしたらっ！ っあああ！」

気持ち良さに追い詰められて中川の声に余裕がどんどんなくなっていく。スポーツの趣味があるだけあって締め付けは良く、腰の振り方もかなり激しく、ただ上下にすだけじゃなくて――。

「はああ♡ これ、好きっ♡」

――腰を落として、大きなお尻を回す様に揺らす動きも見せる。おまんこの奥でチンポを刺激するような動きに中川は限界が来たようで――。

「ちょ、ちょっと、麗子さん！ほんとに、僕もう、このままっ……！」

「あら？ もう出ちゃうの？ それなら……っ♡ 二人で、イキましょう？」

――射精しそうになっていき、麗子をどかさせようとするも彼女自身はそのまま続行宣言♡

さっきまでよりも尚激しく腰を振って“パンパン♡”と音を立てて、その音に二人の汁の音が混ざっていく。

「あっあ、ああ！ 麗子さん！ も、もうっ、僕っ！」

「いいからっ♡ そのまま♡ ああ♡ そのまま射精して♡」

麗子のダイナミックな爆乳を揺らしての騎乗位に、中川もついには果ててしまう♡
ビクッと震えると、彼女のおまんこのなかにザーメンを “びゆるびゆる♡” と結構な勢いで出してしまっていた。

「あ♡ 圭ちゃんの……あつい♡ ん……♡ あああ♡ すご♡ 私も、イッちゃった♡」

「はあはあはあ……こんな、派出所で僕は……」

射精した中川は自戒自責の念を滲ませて片手で目元を隠す様にして反省をしているが麗子は満足そうに一息ついて髪をかきあげた。

汗ばんだ額に髪を張り付けた彼女は腰をあげて、チンポを引き抜いた。

そして、まだぐったりしている中川の股間に顔を寄せると――。

「れろおちゅ♡」

「いっ！ れ、麗子さん、ま、まだ？」

「れろお♡ あら、違うわよ、頑張ってくれたご褒美よ♡ また頑張って貰わなきゃだし♡ ちゅ♡」

――自分のマン汁と、ザーメンで濡れたチンポを舐めて綺麗にしていく。

丁寧な舌使いでじっくりと麗子はそのチンポを綺麗に舐めていくのだった。

中川は必死に落ち着こうとしても深い谷間を見せながらのお掃除フェラに興奮が高まっていき、結局麗子が舐め終わるころには恥ずかしげもなくビンビンになっていたのだった。

「あら～？ 何かしらこれは？ 圭ちゃんのスケベ♡ ほら、まだしたりないなら♡」

麗子はまだまだやる気で、今度は本気とでもいう様にシュシュを取り出すと綺麗な金髪を後ろでポニーテールにまとめる、スポーツを本気でやる時のスタイルにして中川をみつめるのであった。